社会の枠と個人の葛藤

――伝統を壊す勇気はまだ足りない――

賈　伊明

社会には、不可視の「枠」が存在している。この「枠」は、様々な形で現れ、社会の人々の言動を控えさせる。特に、性別二元制の社会規範において、男性あるいは女性に特化した「ことばの枠」が存在する。「ことばの枠」は、主に２つの側面にあらわれ、それは「男性・女性が用いることば」と「男性・女性を表現することば」である。これらは「ことばのジェンダー・ステレオタイプ」の表現だと考えられる。本発表では日本語と中国語を比較し、両言語における「ことばのジェンダー・ステレオタイプ」について述べる。

「男性・女性が用いることば」の例には、終助詞と配偶者の呼称があげられる。

日本語の終助詞に関して、明治時代から女性特有のことばが確立され、終助詞の使用に性差が生じ始めた（鈴木 1998：162）。現代の日本語に性差があるかどうかについては、一致した見解が得られていない。一方、中国語で日本語の終助詞と似た役割を果たすものは「（句末）語気（助）詞」と呼ばれる。女性は男性より頻繁に語気助詞を用いる傾向があり（曹 1987：43）、相対的に女性が多く用いるものがある（劉 1997：158）。発表者が2021年に38人の男女に対してアンケート調査を行った結果、話者の性別と関係ある語気助詞は、疑問文に用いられる*啊*と*呢*のみであった。

配偶者の呼称のうち、妻から夫への他称は特に興味深い。文化庁が1998年に実施した国語に関する世論調査では、「主人」を選択した人が最も多く、その割合は74.6％であった（p. 55）。水本（2017：18）が2015～2016年に行ったアンケート調査においても、「主人」は２番目に多く、全体の33％を占めている。一方、古代の中国語では、妻は夫に対して*当家的*・*掌柜的*（家計を

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

支える人、家主）という呼び方があり、夫は妻に対して*内人*・*内助*（家の者、家内）があった。しかし、現代の中国語では、*老公*・*老婆*、*丈夫*・*妻子*のように、主従関係の意味合いを持たないものが用いられている。

「男性・女性を表現することば」に関しては、日中両言語において類似点が見られる。男尊女卑の時代背景において、日本語も中国語も男性が優先される言語だと考えられる。例えば、日本語においては、「女流作家」や「女性経営者」のような女性標示語が見られる。中国語においては、男性の経営者（*老板*）や教師（*老师*）の配偶者に対して、*老板娘*と*师母*という呼び方があるが、女性の経営者や教師の配偶者に対しては、該当する表現がない。また、日中両言語において、女性を罵倒する表現も見られる。日本語では、「阿婆擦れ」や「アマ」がある。中国語では、一部の単語に意味変化が起こった。例えば、*媛*は本来ならば*名媛*という表現で用いられ、「名門のお嬢様」や「地位の高い女性」という意味であった。しかし、2021年からSNSでは、*病媛*（病気のふりをして注目を集め、利益を得る女性）のような、女性に対して悪意のある表現が出現している。また、*女拳*（本来は*女权*）のような揶揄的な呼称を用いて、フェミニストを攻撃する表現も見られている。

以上のことから、「男女が用いることば」からみると、日本語ではいまでも性差があると考えられる。一方、中国語では性差がほとんどみられない。「男女を表現することば」から見ると、日本でも中国でも、女性を蔑視する表現が存在しており、男女平等が実現したとは言えない。

このような現状において、発表者は日本語を用いる際にある葛藤が生じた。日本語学習者にとって、テレビドラマや書籍等マスコミでよく見かける言語の資料は、真似をする手本となっている。ジェンダー・ステレオタイプが溢れているマスコミのことばを真似した結果、男女不平等なことばを再生産することになる。そのまま再現し、伝承すると、ことばが「悪循環」に陥る恐れがある。

悪循環を断ち切るには、２つの方法が考えられる。一つは、初等教育の段階や日本語教育の現場で性差を強調しないことである。初級者向けの教科書には、「ぼく」という一人称代名詞について、いまでも「男性が用いる自称詞」のような説明がつけられている。もう一つは、マスコミを利用し、ロー

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.

ルモデルを作り、人々の認識を変えることである。自発的に伝統を壊す勇気がなければ、意識させることが必要であろう。

［引用文献］

鈴木英夫（1998）現代日本語における女性語の文末詞，佐々木峻・藤原与一（編）『日本語文末詞の歴史的研究』三弥井書店，139-164.
文化庁（1999）『平成10年度　国語に関する世論調査』.
水本光美（2017）「他人の配偶者の新呼称を探るアンケート調査：『ご主人』『奥さん』から『夫さん』『妻さん』への移行の可能性から」『日本語とジェンダー』17：13-30.
劉素英（1997）中国語、井出祥子（編）『女性語の世界』明治書院，156-161.
曹志贇（1987）「語気詞運用的性別差異」『語文研究』24：44-45+43.

（か　いめい・名古屋大学大学院博士後期課程）

Copyright © 2023 The Society for Gender Studies in Japanese All rights reserved.